



サンプル【乙女は鬼の求愛を知らぬ】

いば神円(しんえん)

【登場人物】

主人公…秋咲夜（あさや）♀

淡い黒髪、淡黒い瞳。影が薄いが虐められて不登校。親子関係は希薄。
一人称、私。

お相手1…黒墨（くろすみ）♂

背が高く体格が良い筋肉隆々、頭部無し、四本角頭部は持ち運びが面倒なので用途が無ければ家に置いている。頭部は厳つい顔つきの黒髪、黒瞳。瞳は力を使う時だけ紅くなる。瞼は基本閉じている。仕事着は紺色の作務衣を着て上に黒い長めの羽織を着て家着は黒い甚平が多い。何だかんだで面倒見が良い黄丸と友。

一人称、俺。目上に対しては私。

お相手 2…黄丸（きまる）♂

二本角の鬼。黄色い髪と瞳。美丈夫だが軽率そうな顔付。顔左半分から左腕指先まで刺青。右側には耳飾り。体系は背の高い細身の筋肉質。浴衣を、あまりきちんと着ないで着崩している事が多い。真面目で不器用な黒墨の友。訛った口調。

一人称、僕。目上に対しては私。目上に対しては訛らない口調だが若干砕け気味。

小さい頃からよく見る夢がある。

霧の濃い場所を歩いては、楽しい音だけを頼りに進む夢。最初その夢を見た時は、もどかしくて悲しくてたまらなかつたが、何度も何度も繰り返しその夢を見続ければ慣れてくるもので。小学三年生になる頃には楽しい音の場所にどうにか行こうと奮闘するようになっていた。

——…夢が覚める前にどうかその場所へ。行って、その楽しい音の正体を見てみたい……

将来の夢を記入するアンケートが配られた。私は『夢の先をみたい』そう、記入し先生に『秋咲夜は詩人だな』と笑われた。

中学になって、その夢は変化を見せる。何時も通りだと思っていた夢の中で、
楽しい音以外の『音』がしたのだ。

足を止め、じつとその音の出所を探す。ほどなくして、なにやら話し声が聴こえ、
どんな内容かはわからないが、私の心は歓喜した。その朝、起きた私は学校を休んだ。
夢の続きがどうしても見たくて。ただ、続きの夢も遠くで内容のわからない
会話が続くだけのものだった。だけど、私は無性に楽しいと感じて、
もっと眠るすべを探した。

学校はあまり面白い所ではなかったもので、私は眠ることが楽しみになり。休日は寝るためにわざと身体を疲れさし、睡眠を促した。眠りやすいなら知るかぎり、
できるかぎり繰り返す。そのおかげか、中学の終わりには話し声以外に何かぼんやりしたモノが見え、
そのぼんやりしたものが何かの作業をしている

事だけはわかった。

話し声もその頃には断片的に聞き取れるようになり。私はそこに座り込んで『ナニカ』の会話を聴いた。その会話は冗談や、今のナニカにとっての世の情勢。噂の誰々の話し、豆知識。大抵よくわからない内容だったけれど、私は心地良さを感じていた。

「……………い…お前、俺の酒を……………んだ……………」

「まーまー」

笑い声。どうやらナニカの一人は酒を飲まれてしまったらしい。その時になつて私は自分の身体を見た。普段からよく使う寝巻き用の柄シャツとジャージのズボン。もしかしたら、そう、思った。

私は胸に重たいものを抱えている。米で作られた透明なお酒。父が幾つも常備している大きな一瓶を抱きしめて話し声に聞き耳を立てる。

「……そ、お前また……」

「まーまー」

笑い声。

「……うだつてなあ」

「……がいなきや……やろ？」

「だからって、毎回毎回……」

「ほなら僕の分けて……から」

「お前の……酒は……ない」

「あはは」

ゴトリツ。

近づける場所に米酒の瓶を置いた。ナニカは気づくだろうか。気づいてくれ

ればいいな。紙を瓶に張つてある。

『どうぞ飲んでください』

これまでの、ささやかなお礼だ。

朝起きると私は空の瓶を抱えて目を覚ました。寝てる間に溢したのだろうか。それとも。声が聴きたくて期待して夜に瞼を瞑る。

すると。

「……酒、美味かったな」

「そうやねえ」

——……やった……

心の中で叫ぶ。どうやら、ナニカの口にあつたようだ。嬉しくてウキウキしている。ヴルルルルと音が聴こえた。

——…お腹減ってるの？

その日から私は料理本片手に酒のつまみを勉強し。一年後には中々、妥協点と言えるモノが作れるようになった。まともな人間関係が築けない私は中学の時から学校に行けなくなっていたので現在は高校には行かず親戚の経営する大型店の酒屋で働いている。そこで貯めたお金で買い物をして家に帰り。半日かけて、これでもかという風に重箱に丁寧に作ったおかずを詰め、明らかにおかしいのだが私は枕の隣にそれを置き片手を緩めに閉めた風呂敷に入れ込んで眠りについたのだった。

「迷子が、また来ている」

「んはっ、ほんまね、この子、日常の一部になっただけか」

「形が、こちらに馴染み過ぎだろう。人の子が何をしてくるんだか……」

何時もの黄泉裏門の空けた霧曇る、その場所に気配が出来たと思えば迷子が横になっている。普段から閑散としている裏門は有事の際に内側から開いて使われるだけの暇な任務場所だ。

「あれ……これって重箱やない？ もし、もし、かわええ、お嬢さん」

「おいつ話しかけるな、こちらに、これ以上根ずいたらどうするんだ」

「寧ろ来たがっつとるやろに」

「……意図は分からんが人が本来いる筈の無い場所だ交流しようとするな」

「ええー！ もう酒もらったんやし今更やんね。ね？ 眠れる乙女」

「触れようとするとするんじゃないっ！」

「この重箱は……手作りとみた。酒の事といい、もう僕らのこと大好きやんかあ。ええやん、もう僕らのにすれば、ええやん」

「良くない。何一つ、良くない」

「寧ろ、こんな小さい時から食べもせず見守ってた僕を褒めてほしいわ」

「それは俺もだろう」

「君は、あれから顔無し鬼やから頭部がある家やないと食えんやん。僕は数歩進めば食えるのに食わんかったんよ。偉いやろう」

顔無し鬼と言われた彼には頭部が無く固そうな身体のみが動き、その首元から声が漏れ出る。

「……別に人食いじゃないだろう、お前は」

「くはっ、そやね」

黄色い髪を揺らして嘖き出して笑う二本角の鬼。

「肯定するなら今すぐ離れろ」

「いやいや、いけず。それに、もう時は過ぎたわ」

顔無しの筋肉で構成された身体に首根つこを掴まれている軽率そうな顔左半分から指先まで渦巻く刺青をしている二本角の鬼がケラケラと笑う。笑えば右側の耳飾りが、ちやりちやり揺れた。

「乳臭い未通から乙女の匂いがして、どれぐらいよ、もう、ええやんな」

「何も良くない。帰れなくなったら迷子が困るだろう」

「ほんま？　ほんまに乙女は困るんか？　ほんまに君は、そう思うんか」

「……ああ」

「今、間があつたー迷つとるやん」

「迷つてない」

「そうやって、お得にならん嘘吐くから正直者やないと機嫌の悪いのに首跳ねられてまうんや」

「煩い」

「それになあ。乙女は何時も何時も、ここに現れとるけど気が変わって他で過ごして僕らみたいに余裕のあるのと違ごうて食われるかもよ」

「……今の時代、人食いは、そうおらん」

「ややや、ちやうやろ。未通なくす話やん」

「……」

頭部は無いが意識が眠る娘に向く顔無し鬼。

「まあ、側におるだけで僕らの影響少しずつ受けとるんやし」

「……」

「人の関心は薄れとるやろうけど分からんやん？」

顔無し鬼の首筋の血管が、ぴくりぴくりと反応した。

「……アホやなあ君は」

牙を見せて仕方なさそうに笑う二本角の鬼。

「そんじゃあ触れはせんよ。文通するだけや」

そう言つて予め用意していた紙に筆を滑らせ何やら書き始める二本角の鬼。「二本角の鬼である僕の名前は黄丸（きまる）で、こちらの顔無し四本角の鬼は黒墨（くろすみ） ええなやろう、お嬢さんのお名前は？ つと……」

書いて折りたたんだ紙を肌に触れないように乙女の内側の寝間着の中へと器用に入れる黄丸。

「……名前を聞いて、どうするんだ。呼んで定着したら……」

「もらえば、ええやん。ただ来るだけなら例は幾つもあるけれど好き好んで、こんな『どうぞ食べてください』つて重箱用意するとか、よっぼどの物好きや。もう気にせんで愛でたろうよ」

「……」

風呂敷を開けて蓋を開ければ色とりどりの料理が並んでおり丁寧に一口づつ食べられるそれは酒のツマミに見える。それを見た途端に黄丸と黒墨の喉元から、ヴルルルルつと音が鳴った。

「は〜？ きゅんつてしてもうた。ほんまつ、あくつてか君も鳴つとるやんつ！
……認めたら？」

「……これは自然現象だ」

「ひー笑うわ」

腹を抱えて、ケタケタ笑う黄丸は二膳入れられていた箸の一膳を持ち卵焼きを、ぱくりと食べる。

「おお、出汗や好きなやつ」

「……」

「可哀想になあ家帰らにや頭無いもんなあ」

含み笑いで指摘され、ぶつきらぼうに返答する黒墨。

「煩い。残せよ」

「あいよ」

ぱくぱく食べながら眠る乙女を眺めていれば霧が濃くなり気配が薄くなって

いく。

「あーあ。ちゃんと唾つきたいわあ……」

「……迷子は知らぬだけ。ここが黄泉境と知れば来なくなる」

消えた乙女の地面に手を触れて、そう呟く黒墨。それを黄丸は黄色い瞳を細めて鼻で笑った。

「教える機会なんて幾らでもあったろうに、ほんま君はアホやな」

☆☆☆間☆☆☆

「あっ♡ あっ♡ ああっ♡ ひう♡」

最初は優しかった黒墨さんの腰付きも一度、内側で出すと動きを増した。まさか続けてされるとは思わず驚いたけれど時間が経つと重い痛みは随分と遠く。

むしろ甘く脳みそを痺れさせそうな感覚が心地良い。

「あひっ♡ 舐めちゃっ♡ あ♡」

俯せにさせられて腰を上向かせられたと思えば股の間に頭部が入り込み豆を丁寧に舐める。その状態で黒墨さんの肉棒が、これでもかとお入りして私から喘ぎ声が上がった。

「ひいん♡ あひっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

びしやっ♡ じゅるるる♡ ぱちゅんっ♡ ぱちゅんっ♡

「っ♡ 出すぞ……っ♡」

「う、うん♡」

どりゅんっ♡ ぼびゅっ♡ びゅっ♡ びゅーー♡

中出しされながら快感に震えていれば目の前に影。

「……終わるまで待とう思っと思ったけど長いし、ちん棒痛いわ」

見上げれば黄丸さん。

「まーぜーてー♡」

ぬ……ぬぷ……ぬ……ぬぷぬぷ♡

黄丸さんの膝上に座らされ両腕に両脚をかけた状態で膣内に肉棒を入れられていつている。私は、そんな黄丸さんの肩にしがみついて昨日の夜舐めた肉棒の大きさを想像しながら内側の存在を再確認していた。

「はあ……♡ 尻穴に入れるんは、まだ怖いやろう？ そのうちね……♡」
黄丸さんに意味ありげに尻を撫でられ。

ぐぶっ♡ ぬぶんっ♡ ぬぶんっ♡ ぬぶんっ♡

次の瞬間には揺さぶられて私は止められない声を上げた。

「気持ちー？ アサちゃんの中、僕は、すっごく気持ちいいよ♡」

「あっ♡ うっ♡ いうっ♡ いーえうっ♡」

「あはは♡ 舌噛まないように、あーん♡」

気持ち良いと伝えようとして唇が重なり舌が入り込む。くちゆくちゆと舌が絡み合う深いキスをしながら腰が下から回すように動かされ。

「んんんんん♡」

もう最初の痛みなど、どこえやら脳みそを揺さぶる快感の甘い痺れしか感じない。

「ふう♡ イっちゃった？ かーわえーの♡」

ぱちゅんっ♡ ぱちゅんっ♡ ぱちゅんっ♡

「一回、僕も出したろ♡ つは♡」

「あふうう♡」

奥をぐりぐりされたかと思えば内側で肉棒が蠢いて液体が、じんわりとお腹の中に広がっていく。

「ん……♡」

ちゅう、ちゅうつとキスをしながら、お互い余韻を味わう。

「玉、空っぽになるまでしたいけど湯、浴びて食事にしよか……」

「はい……♡」

☆☆☆続きは本編で！

サンプル【乙女は鬼の求愛を知らぬ】

発行日 2023 年 9 月 29 日

著者 いば神円(しんえん)
<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
